

# 狂人ガイドブック

yuukitkhs

※

---

※

狂人。

そんな言葉を、あなたは、知っているだろうか——？

——「知っている」——。

狂人。それは、狂いに狂った人間の俗称。

通称、〔殺人鬼〕と呼ばれる類のものだ。

殺人鬼。

あなたはその言葉を聞いた事があるだろうか——？

——「ある」——。

まあ、そりゃあそうですね。だって、誰もが一度は聞いたことのある言葉ですから。——って、さっきの質問と同じような内容だったな。

じゃあ、見たことはあるだろうか——？

有る？ 無い？

——「     」——。

あああー。

一人で、会社の外（中庭らしき場所）にある、木でできた（もしかしたら、木目が印刷されたプラスチックなのかもしれない）ベンチに腰を掛けているオレ（係長）はため息（もしかしたら、ため息じゃないのかもしれない。オレ自身にもよく分からない）を口にする。

この世界は狂っている。狂って狂って狂っている。確実におかしい。ありえない。理不尽すぎる。ふざけるな。ぶったおしてやる。こんな世界を作った奴を。この世界で一般的となっているシステムを構築した奴を。けどそんな奴はもう、とっくのとうに死んでいる。多分。だから、ぶったおしたいけど倒せない。なんだか、むずがゆいような——そんなような錯覚にオレは陥ってしまう。オレ自身にもよく分からないけど、何故かそうってしまう。

オレは思っていることを全て口にする。もちろん小声で。何かの障害者だとか、変人だとか、そんな風に思われるかもしれないけど、別にそんな事はかまわない。オレはただ単におかしいと思っていることを何回も口にしているだけなのだ。それぐらいならかまわないとオレは思う。というか、このくらいで、障害者だと勘違いする方がおかしい。お前だって、絶対に他人にそう思われたことが一度はあるはずだ。違うか？ オレは何かおかしい事を口にしているか？ 何もしていないとオレは思うんだけど。気のせいだろうか？ いや、気のせいじゃない。間違っているのは絶対に僕ではない。間違っているのはこの世界の方だ。

理不尽だ。理不尽極まりない。この世界は狂っている。おかしい。

オレが、「この資料をコピーしてくれますか？」って、大都会東京の超高層ビル（確か、百階建て——だっけ？）の中に入っているオレの働く会社（もっと格好よく言うと、オフィス）の中で、ちょっとだけだが、『カワイイ』とオレは思う女子社員にそう言ったら、「無理です」って、きっぱり断った。断りやがった。ぼっさりと。斬り捨て御免（古いかな？）、というようにぼっさりと断った。

ふざけんな！ オレは係長だぞ。係長という管理職なんだぞ。偉いんだぞ。俺は幼稚なのかもしれない。幼稚園児みたいな人間なのかもしれない。けれど、オレは係長。お前はただのOL。分かるか？ これがわからなかったら、確実に猿以下の脳味噌っていうことだ。お前はOLなの！

オレは係長なの！ 分かる？ オレはお前よりも偉くて、お前はオレよりも下の存在なの！ 分かる？ 係長という意外に重大な立場のオレにたてついてもいいと思ってるのか！ あぁん？  
ふざけんな！

オレはヤクザの様な口調で言葉を発する。オレは隙も与えずに、グイグイ押していった。『やれ、お前、さっさとやれ』って。そしたら、お次は、「キャー」だってよ。ふざけんな！ 今度悲鳴をあげたら殺してやる。果物ナイフを胸に一刺ししてグサッてやって殺してやる。殺ってやる（やってやると読む）。で、女子社員をナイフで刺殺したら死体を処理する。その死体の処理の方法はいたって簡単かつシンプル極まりないもので、誰も寄り付かないような木がうっそう

と茂った森に死体を持っていき、そしてその森の中に死体を遺棄するか、土をスコップとかシャベルとかで土を掘り返して、そして、その中に遺体を埋める、という二つ。

ははははは！ 完全犯罪だ。オレは、完全犯罪を成し遂げる事ができる！ ははははは！ オレは高らかに笑う。鼻で笑う。ははははは！

もう一度オレは笑った。

だって、別に、オレにはあいつを殺す動機なんてひとつも無い。だから、あいつが急に失踪して、『これは殺人じゃないか？』とかそんな風に騒がれたとしても、日本中で騒がれたとしても、世界中で騒がれたとしても、オレには疑惑の目は向けられないはずだ。絶対に。ははははは！ オレ最強。ははははは！ オレってば完璧だってばよ。完璧人間だってばよ。あはははは！ 愉快だ。面白すぎる。愉快爽快、っていうのは、こういうことをいうんだな。初めて、この言葉の使い道が分かったような気がしたぜ。

オレは、どんどん押していった。『やれやれやれやれ——』と呪いめいたものを小声で延々と発した。「やって」最後の一押しをオレはした。で、そしたら、最後は「セクハラー！」だってよ。ふざけんな！

次こそ殺すぞ、と思った。心のそこから思った。本当に殺そうかとも思った。けれど、オレの周りにはその女子社員を殺すことのできる様なものはなかった。だから、殺せなかった。もしも、近くにナイフの様な刃物があったら、確実に刺し殺していたに違いない。

「殺すぞ！」と口から言葉がかかるく出て行きそうだった。スイスイスイ〜、と出て行きそうだった。オレは慌てて、口を硬く閉じた。手で口を押さえた。二重の扉で言葉を出させないようにした。

ぐぐ。出て行きそうだ。ヤバイ。本当にヤバイ。ころ——、ころ——、ころ——、す——。ああ！ ああ！ ああああああ——！ 口を手で塞ぐ。ウウウ！ ううう！ うう——！ ——ふう。セーフ。

さっきの言葉を——悪い風に言い換えれば——暴言を女子社員に吐いたら、確実に、係長からヒラになっちまう。そんな事態は絶対に避けたい。オレは二十歳からこの世界に入り、そして、二十二歳と言う異例の若さで、去年係長に昇進したのだ。今は、昇進を期待されているのだ。上司から。だから、こんなところで、昇進街道を外れたくは無い。道を外したくは無いのだ。断崖絶壁の谷を横断するためのつり橋の木板を踏み外したくは無いのだ。その気持ちはみんなわかってくれるだろう。踏み外したら、確実に——死——だ。死ぬのだ。絶対に死が待ち構えている。死が——というか死神が——いや、悪魔が——なんでもいいか。とにかく、地獄にいる何か、  
「いらっしゃいませ〜」って絶対に言ってくる。そう、暢気に。そう、陽気に。そう、無邪気な笑顔で言ってくる。喜びに満ちた顔で言ってくる。そう、ファミレスの店員のように——そう、喫茶店のように。そんな感じに言ってくる。絶対に。

——って、そんなことはどうでもいいか。そうだな。どうでもいい。

まあ、そういうもんだ。独り言っていうものはそういうもんだ。とにかく、この世は——この世界は、狂っている。おかしい。なにかがおかしい。これは、オレの望んでいた世界じゃない。なんで、オレの望んでいた世界じゃないんだ？ 別にオレのための世界というわけではないけれど、ある程度、世界というものは、自分自身が生きている場所なんだし、少しは、自分好みに



## 2

ボクはある美術館に勤めている。

その名は、松谷美術館。『マツタニ』ではなく『マツヤ』と読む。よく間違えられる事が多いから、ボクは毎回、そう発音している人に、『間違ってますよ』と親切に声をかけてあげる。けれど、声をかけたら、みんな決まってこう言う。『どっちでもいいじゃん。うっさいなあ！』って。

どっちでもよくないからボクが注意してやってんだろ。お前何言ってるの？ ふざけんなよ。次、そんな事いったら——。

次の言葉は伏せる。それは——言っではいけない言葉だから——それは禁句だから——って、そんなことはどうでもいいんだ。今は。とにかく、今は自分の気持ちを表現したい。過剰な表現でもいい。とにかく、表現したいのだ。なんでもいい。表現させてくれ。いいか？ いいのか？

言ってもいいのか？ 表現してもいいのか——？ ——いいのか？ いいんだな。ボクは口を開くぞ。開いてしまうぞ。ボクは口を開く。

『殺したい』それが次に言いたかった言葉。それが、過剰な表現の言葉。いっではいけない言葉。禁句。『どっちでもいいじゃん』言葉がリピートされる。——なんだか、殺したくなった。刺し殺したくなった。方法は何でもいいから、殺したくなった。どういう方法でもいいから、とにかく殺したくなった。——けれど、殺せない。ボクには殺せない。方法は何でもいいのだけれど、殺せない。警察に捕まる、という事が恐ろしくて、殺せない。

なぜ、恐ろしい？

なぜ、殺せない？

——それは、ボクがいくじなしだからだ。情けない人間だからだ。実行しよう、と心に決めても——決心してもちゃんとそのことができない——要するに、駄目人間だからだ。死んでもいい人間だからだ。どっかの大企業の社長が死ぬより、ボクが死んだほうがいい。それは——ボクが駄目人間だからだ。それは——死んでもこの世界が変わらない人間だからだ。大企業の社長がもしも死んでしまったら、この世界はきっと劇的に変わることだろう。きっと劇的に変わってしまうだろう。もしかしたら、世界が滅びてしまう可能性も出てきてしまうかもしれない。世界が消えてしまう可能性も出てきてしまうかもしれない。嘘みたいに聞こえるかもしれない。馬鹿みたいに聞こえるかもしれない。けれど、本当にそうになってしまうかもしれない。本当に、本当に——。ボクはもう一度、最初に言い放った言葉を繰り返す。『ボクは生きている価値が無い人間だ。だから、死んでもいいのだ』。もう一度繰り返した意味は——そう、ボク自身にボク自身の価値を叩き込むためだ。ボク自身はナルシストみたいなものだ。自分のことを過大評価しているのだ。誰もがそうだ。そうなんだ。

価値。

そう、ボクの価値は最底辺。人間の中での一番下に存在する人間なのだ。最下層に住んでいる

住人みたいなものだ。そう——要するに、ゴミなのだ。社会に、「要らない」といわれているゴミなのだ。ゴミ屋敷に大量に溜まっているゴミなのだ。ゴミ屋敷に大量に溜まっているゴミは全て、時間が経てば捨てられる。燃えるゴミなら焼却処分される。燃えないゴミなら埋め立てされる。

ゴミ。

ゴミ。ゴミ。ゴミ。ゴミ。ゴミ。ゴミ。ゴミ。ゴミ。ゴミ。ゴミ。ゴミ。ゴミ。ゴミ。ゴミ。ゴミ。ゴミ。ゴミ。ゴミ。ゴミ。

そう、ボクはゴミだ。——とそういう風に錯覚を起こしそうだった。もしかしたら、そういう錯覚を起こしたほうがよかったのかもしれない。けれど、ボクには——人間という生物には必ず、自我というものが存在する。心の奥底に潜在している。だから、自我がある限りは、ボクはゴミだと自分で認識はできない。なんて、面倒なシステム。面倒なシステムだが——このシステムぐらいなら簡単に、ちょちょいのちょいで改変できそう。改造できそう。けれど、意外に難しそうな気もする。どうする？ やめる？ それとも——やる？ どっち？ どっちなんだ——？ ——ま、どっちでもいいか。あ、じゃあ、両手同士でジャンケンして、右手が勝ったらやる、で、左手が勝ったらやらない。よし、そういうことにしよう。そうしよう。さて、やるぞ！

——最初はグー。ジャンケン、ポン！ ——あれ？ どっちともグーだ。もう一回だ。最初はグー。ジャンケン——え？ へ？ あら？ あれ？ ちょっとこれマジで意味不明なんだけど。何これ。ありえない。マジで。毎回両手どっちとも同じじゃん。さっきはグーで今回はパー。は？ こういうのホントありえない。マジで。マジでありえない。

——あ、今度こんな風になったら、自分で自分を殺害しようかな。こういうのなんかうざったいし。マジで。

ん？ もし、本当にそうになったら殺害方法は？ ——じゃ——えっとね——あれにしよう。ええと、そうそう、遠隔操作で殺害する方法だ。ボク、あれ好きなんだよね。あ、そうそう、物理トリックとか機械トリックとかそんな名前だった。そうだそう。そういうのボク好き。大好き。だから、やっぱり、自分を自分で殺害する方法はそれにしようかなあー。あ、でも、それじゃ自分で自分を殺したわけじゃなくなっちゃうな。だって、『ピ』ってリモコンのスイッチか何かを押して、ナイフみたいな刃物みたいなものがビュンって飛んで、ボクの胴体にバンってなるからあ——あ、それじゃあ、機械がボクを殺したことになるっちゃうんだよね。それじゃなくて、ちゃんと、ボクがボク自身を殺害できる方法。そういう方法を今、ボクは欲している。求めている。要求している。だから、皆さん！ だから、世界中の皆さん！ ボクに、そういう方法を教えてください。あるいは、神様！ あるいは、殺害の神様！ ボクにそんな夢のような方法を授けてください。なんでもいいんで。はい。よろしくおねがいます！

——なーんていう風に頼んだとしても、きっと、ボクが本当に死にたいと思っているのなら、方法を授けてくれるだろうけど、死にたくないという思いが少しでも残っていたらきっと授けてはくれないだろう。そういうものだ。神はボクに味方してくれる時もある。けれど、その反面、ボクの敵になることもある。

——というか、システムを改変するかしないか、っていう話だったと思う。最初は。どんだけ、話は道をそれていたんだろう？ まあいいか。なんでもいいや。ははは。





オレは会社から自宅に帰ってきた。舞い戻ってきた。あの理不尽極まりないゴミくずみたいな会社から帰ってきた。オレは、自宅（小さくてぼろぼろのアパート）の中にある、テーブルの上にポツリと置かれたノートパソコン（かっこいいけど意外に型落ち）の前にポツリと座っている。

カチャカチャカチャカチャ。

キーを叩く音。もちろん、キーっていうものはパソコンのキーの事だ。

あ、ちなみに、オレの持っているパソコンはノートパソコンだ。正確に言うとノートトップパソコン。オレの持っているパソコンはこれ一台だけだ。デスクトップなんてものはない。だって値段が高いし、そんな物を置く場所が無いからだ。まあ、デスクトップじゃなくてもある程度はこのノートパソコンで済ますことができるからなにかと不自由した覚えは無い。文書作成だって、見取り図作成だって、会計作成だって、ある程度なら大丈夫だからだ。けれど、膨大な量の画像や映像を取り込むことはできない。ハードディスクの容量がパンクしてしまう。そういうことをする場合はやっぱりデスクトップとかの方がいい。実を言うと、オレは趣味で映画を作っている。その映画作りをはじめるとさっきみたいなことをしなくちゃならない。で、このノートパソコンでやると、大体一、二時間したらフリーズしちゃうんだよね。そこが少し困っちゃうんだよね——。

——なんて、そんなことはいい。どうでもいい。

オレは、超巨大掲示板に今、書き込みをしようとしている。すごいスピードでキーを押し、タイプしていく。

カチャカチャ——。カチャカチャ——カチャ。タン！ タン！ タン——。

タイプが終わった。さて、あとは〔ENTERキー〕を押せば、書き込みがされる。だが、その前に、もう一度、さっきまでタイプしていた文を見直す。

【ぼくはますやといいます。みなさんきいてください。みみをすませてきいてください。ぼくとおともだちになってくれるひとはいませんか。もういちどくりかえします。ボクとおともだちになってくれるひとはいませんか。もしぼくとおともだちになってくれるひとがいたらへんじをしてください。へんじまっています】

よし。オーケーだ。オレ的にはオーケーだ。グッジョブだ。〔ENTERキー〕をオレは押した。

書き込みがされた。

ボクは自宅に戻ってきた。自宅は要するに、美術館に勤める人のために建設された社宅、だ。帰ってきてから、すぐに、ボクはリビングに行き、コタツの上に置かれたノートパソコンを起動させる。

ノートパソコンの不気味な起動音。

ウウウウ——ン——ウウウ——。

液晶ディスプレイにOSの画面が表示された。ちなみに、OSはマックOS。正式に言うのなら、マッキントッシュOSだ（ったような気がする）。マッキントッシュOSというものは、その名の通り、マッキントッシュのためだけに創られた、製作されたOSだ。そもそも、OSというものは、〔オペレーションシステム〕という言葉アルファベット二文字で略した言葉だ（ったような気がする）。オペレーションシステムという物は、要するに、コンピューターを操作させるために創られたCPUだ。そもそも、CPUというものは——。

——ってこのまま話し続けたら意味が無い。というより、疲れる。もう駄目だ。もう、話す気は無い。気力すらない。というか、これで気力があつたら相当すごいと思う。

とにかく、全てをまとめると——パソコンはマック。マッキントッシュ。以上でボクの話は終了です。

で、コンピューターを起動させた後、ボクはインターネットに接続しようとボクは試みる。

USB接続型マウスをボクは右手で操り、インターネットに接続するためあるアイコンのショートカットをかち！ かちかち！とクリックした。……あれ？ なんで、まだ、インターネットブラウザのウィンドウが出てこないんだ？ 無線でのインターネット接続が何故だか遅い。——まあいいや。少し待とう。

——そして、少し待った。そうしたら、何事も無かったかのようにウィンドウが出てきて、インターネットブラウザが起動し、インターネットに溢れる情報が表示された。そして、ある検索エンジンで、「○○」と超巨大掲示板の名前を入力し、〔ENTERキー〕をタン！と押した。一気に検索がなされた。検索したら、一件だけ検索がHITした。その場所をダブルクリックした。新しいウィンドウが開き始めた。そして、超巨大掲示板の画面がノートパソコンの液晶ディスプレイに表示された。

今日は書き込みが一件されていた。その書き込みをボクは読む。

【ぼくはますやといいます。みなさんきいてください。みみをすませてきいてください。ぼくとおともだちになってくれるひとはいませんか。もういちどくりかえします。ぼくとおともだちになってくれるひとはいませんか。もしぼくとおともだちになってくれるひとがいたらへんじをしてください。へんじまっています】

ひらがなだらけの文だった。ひらがなだらけの為、すごく読みにくい。読むという行為に一苦

労するくらいに読みにくかった。

どうやら、お友達を探しているらしい。

——お友達って！（笑）

アハハハハ！ 笑っちゃうね。

お友達って！（笑）

ま、面白そうだから、書き込んでみるか。面白半分で、ボクは書き込みをすることにした。素早いキータッチで掲示板に書き込むために、文字をひたすら打つ。

【おともだちになりましょう！ になりましょう！ なってあげましょう！ とりあえず、こんどあいませんか？ どこかで。どこがいいですか？ どこでもいいですか？ どこでもいいんだったらへんじしてください。かきこみしてください。よろしくおねがいします。そうしないとわからないので】

きっと、さっきの文に感化されたのだろう。ボクもひらがなだらけだ。読みにくい。けれど、一から変換しなおすのもなんだか面倒なので、もう、これで書き込みをしてしまおう。〔ENTERキー〕を押した。書き込み完了。

今日もまた、オレは仕事から帰ってきて、ノートパソコンを起動させる。起動まで約一分。ノートパソコンが起動するまで、オレは待つ。

グウウ。腹が減った。インスタントラーメンでも作るか。オレはぼろっちいキッチンへ行き、コンセントにプラグがささった電気ポットの蓋を開ける。残量ゼロ。

ああ、もうここから電気ポットでお湯を沸かすのが面倒だ。あ、じゃあ、そうだ。やかんでお湯沸かそう。そうしよう。というか、そういう手があったか。思いもしなかった方法だったな。よし、今度は、そういう方法を覚えておこう。そうしておけば、きっと、思い出すはずだ。オレはやかんに水を張り、ガスコンロでやかんを沸かす。

——とそこでノーパソ（ノートパソコンの勝手な略称）が起動した。オレは、ノーパソの前にとんぼ返りして、マウスをカッコよく見えるように操作する。

USB接続型マウスの左側をカチ、カチカチカチカチ！とクリックし、インターネットブラウザを開き、インターネットを閲覧するモードにオレは自動的に入る。お目当ては——そう、モチのロンで、掲示板だ。

さあて、書き込みは——あった。

ナニナニ？　なんて書いてあるんだ？　ええと——。

【おともだちになりましょう！　なりましょう！　なってあげましょう！　とりあえず、こんどあいませんか？　どこかで。どこがいいですか？　どこでもいいですか？　どこでもいいんだったらへんじしてください。かきこみしてください。よろしくおねがいます。そうしないとわからないので】

へえ。

そういう人間もいるんだ。そういうアナログチックな人間もいるんだ。意外にいるもんなんだな。そういう人間も。インターネットだけでの会話とか無理なんだろうな。きっと。というか、何で無理なんだろう。おかしくないか？　だって、インターネットという物は、そもそも、人間がコミュニケーションをとるためのツールとして創ったものだ。なのに、そのツールを創った人間がそれを使わなくてどうするのだろうか？　おかしくはないか？　矛盾している。創ったのに、使わない——すごく矛盾している。それは、ただの浪費——お金もだし、時間もだ。ああ。おかしい。人間が、ツールに操られてどうするんだ。立場逆だろ。

あははっははは。笑っちゃう。

けど、ま、いいか。会って見ないと分からない——合ってるからな。意味が。確かに、オレもそう思っていたんだ。丁度良かった。『あのこと』のことは、さすがに、ネットの掲示板じゃ困るもん。ばれちまうぜ。だから、やっぱり、現実世界で会わないといけないよな。そうだよな、うん、そうだよな。そうだよな。

じゃあ、書き込みを——と、ちょっと待った。さっきの書き込みをした人の名前が分からない。オレはちゃんと書き込んだのに、何で、書き込みをした奴は名前を書かないんだ！ 書いたんだから、普通は、書くだろ！ そこは！ ようし、それを追求してから、待ち合わせ場所などを決めて、会う事にしよう。うん、そうしよう。

キーを目にもとまらない速さで叩く。叩いた文字が液晶ディスプレイに表示されていく。とてつもない速さで。もう、液晶ディスプレイが追いついていない。いや、こういう場合は、ノーパソ自体が追いついていないのだろうか？ ——ま、多分、後者だろうな。

カタカタカタカタ——。キータッチ音。カタカタカタ——タン！

文が書き終わった（あるいは、キーを叩き終わった）。もう一度、オレはその文を読み直す。

【ますやです。あうんですか？ ぼくと？ そうですか。あうんですか。そうですか。それだったら、まちあわせばしょをきめましょうよ。そうしないとすれちがいになっちゃいますよ。すれちがいつうしんですか？ そんなことぼくはいいってないですよ。ちゃんとまじめにはなしをしているんですよ。ちゃんときいてくださいよ。とにかく、まちあわせばしょをきめましょうよ。

それと。

なまえをおしえてください。ぼくはなまえをおしえたんでおしえてください。あうときにこまりますか？ まちあわせばしょでだれがあうひとなんだろう？ とかそんなふうにかまりますか？

あそうですか。こまりますか。でもいちおうおしえてください。よろしくおねがいします。

あとそれと。

このかきこみをよみおわったらすぐにまたかきこみおねがいします。

それではぼくはほんのすこしだけここからすがたをけします】

うーん。痺れちゃうくらいにうまい文だね。すごいわ。やっぱ、オレには文の才能がついてるわ。——ま、そんなことはよしとして（というかどうでもいいからそんなことはひとまず関わらないで）——とりあえず、この文は大丈夫そうだ。誹謗中傷なしだ。オーケーだ。このままの文で、カキコ（書き込みの勝手な略称）しちゃおう。そうしちゃおうYO！ オレは〔ENTERキー〕をタン！と勢いよく押した。

ノーパソの動きが一瞬だけ悪くなった。しかし、それはすぐに改善された。つまり、さっきまで書いていた（あるいは叩いていた）文が掲示板に書き込まれたということだ。無事に。液晶ディスプレイに表示されている電子掲示板を見る。さっきの文がそのまま掲示板に書き込まれていた。

書き込み発見。

なんのことがかいてあるんだろう？

ボクは液晶ディスプレイを真剣に見る。液晶ディスプレイに表示されている掲示板に書き込まれた文を読む。モチのロンで——真剣にボクは読んでいる。

【ますやです。あうんですか？ ぼくと？ そうですか。あうんですか。そうですか。それだったら、まちあわせばしょをきめましょうよ。そうしないとすれちがいになっちゃいますよ。すれちがいつうしんですか？ そんなことぼくはいいいていないですよ。ちゃんとまじめにはなしをしているんですよ。ちゃんときいてくださいよ。とにかく、まちあわせばしょをきめましょうよ。

それと。

なまえをおしえてください。ぼくはなまえをおしえたんでおしえてください。あうときにこまりませんか？ まちあわせばしょでだれがあうひとなんだろう？ とかそんなふうにかまいませんか？

あそうですか。こまりませんか。でもいちおうおしえてください。よろしくおねがいします。

あとそれと。

このかきこみをよみおわったらすぐにまたかきこみおねがいします。

それではぼくはほんのすこしだけここからすがたをけします】

はあ。なげーな。文が。もうちょっと文をまとめろよ。『すれちがいつうしん』のクダリいらなかっただろ。だれも『すれ違い通信』なんていってねーし。お前の幻想だし。絶対に、一人で会話してんじゃねーよ。なんか、この書き込みしてる奴、妄想癖激しすぎねーか？ ぜってー激しいと思う。ボクは。——というか、あれ？ ボク、もしかして、なにかに感化されてしまった？ もしかしたら、ヤンキーまがいの何かに感化されてしまった？ なんか、前と口調が違う。もしかしたら、さっきの文に——いや、そんなわけが無い。だって、さっきの文にはこんな口の悪い言葉はかかれていなかった。——それなら——なぜ——？ 知らねえ、オレは何も——。——なんでだ？ なんで、『オレ』なんて言葉が——。

——って、これが普段のボクの口調だからしょうがない。いや、仕様が無い。今の今までは、セーブしていたのだ。無理やり、口調を変えていたのだ。さっきまでの口の悪い口調から変えていたのだ。何で、口調を変えていたかって？ そんなこと、絶対に誰だってわかるはずだ。というか、分からなかったら、人間じゃないといえるだろう。それくらい、分からないわけが無い。分からなかったらおかしい。分からなかったら、末代までの恥だ。恥さらしとして生きていくしかないのだ。ぎゃははは。

理由。それは——顔と口調のギャップが激しすぎるから。

そんなばかげた理由。意味不明と思われてしまいそうな——そんな理由。けれど、そんなばか

げた理由でボクは口調を変えていたのだ。ばかげた理由だと、他の人からは映るかもしれない、見えるかもしれない。あるいは、ボク自体が馬鹿だと映って見えるかもしれない。けれど、ボクにはすごく大切なものなのだ。そう見えないうって？ そう見えないうかもしれないけれど、大切なものなのだ。ボクにとっては。

さあて。書き始めるか。書き込みを始めるか。とにかく、名前と待ち合わせ場所を書けばいいのか。オーケー。書きちゃおう。早めに書きちゃって、早めに夕食を済ませよう。といっても、夕食は三分という超短時間でできてしまう既製品——インスタントラーメンなんだけどね。お湯沸かして、そこのなかに、油で揚げられた麺と粉末スープ入れて三分待って、器に入れたらもう完成。だから、早く書き込みをする理由はよく分からないんだけどね。だけど、ボクは腹が減っているので、早めにインスタントラーメンが食べたい。食いたい。喰らいつきたい。

キーを打つ。ひたすら打つ。カタ——。不気味なくらい連続して聞こえてくるキーをタイプする音。キータッチ音。

カタ——。うっせー。うっせーうっせーうっせー。何度言ったら分かるのだろう。とにかくうるさい。

煩い。

うっとうしいうっとうしいうっとうしいうっとうしい——あああっああああ！ あああ！ もう——ああああ！ うっとうしい！ うっとうしすぎるううううう！ つぶざっけんなああああああああ！

——なんてね。

タン！

終わった。キーを叩き終わった。文を書き終わった。

その文は液晶ディスプレイにちゃんと表示されている。

ボクはその文をじっと読み返す。

【ぼくはおがわといいます。あさのじゅうじにはちこうまえでどうでしょうか。お一けーでしょうか】

——ここである疑問が出てくる人がもしかしたらいるかも知れない。

なんで、キーを叩く音と文字数が比例していないのか——という疑問が。

それは、最後にほとんどの文を消したからだ。マウスで文をドラッグし、〔BACKSPACEキー〕を押したからだ。

『ナゼ？』ときっと誰かがボクに訊くことだろう。だから、ボクは先にもう言ってしまう。

——駄文だったから。稚拙な文だったから。それだけ。ま、そんなもんだよ。そんなもんだ。そんなもん。理由ってのは。理由ってのは、どうでもいいもんだ。そういうものだ。関係なんて無いのだ。ははははは。

ノーパソの液晶ディスプレイをオレは見つめる。  
ジーンと。

【ぼくはおがわといいます。あさのじゅうじにはちこうまえでどうでしょうか。おーけーでしょうか】

OKだ。というか、なんで「OK」とは書かないで、「オーケー」書くのだろう？ これは何らかの条件なのだろうか。何らかの規則なのだろうか。ま、そんなことにオレはこだわらないけれどね。

さて——明日か——。

こっちもOKだ。

望むところだ。

あ、というか、書き込みしないと。

ノーパソを立ち上げ、すぐにインターネットに接続する。掲示板はショートカットが作成されているから、そこをクリックすればすぐに出てくる。

よし出てきた。

カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ——。

書き込み用の文が完成した。もう一度、オレは、その文を読み返す。

【こちらはおーけーです。じゃああしたあいましょう。すれちがいになってしまうかもしれないけれど】

タン！とキーを押し、書き込みをオレはした。

書き込みを終えたオレは臨戦態勢にはいった。明日だ。明日——二千十年九月二日——明日で——今回の『計画』の八十パーセントは決まる——といっても過言じゃあない。だから、やってやろうじゃないか。だから、やる気を出して、頑張ろうじゃあないか。

なんだかよく分からないけれど——なんか笑っちゃう。ははははは。

けれど、顔だけは引きつっていた。



※※※

---

※※※

明日——か——。

書き込みを終了したボクは、ノーパソの前でぼおっとしていた。

書き込みがきた。

【こちらはおーけーです。じゃああしたあいましょう。すれちがいになってしまうかもしれないけれど】

そうか——オーケーか。

ノーパソの電源を切り、ディスプレイをパタンと閉じた。

ふと、明日の事がいろいろと気になってくる。

どんな人なんだろう？ どんなことを話したいのだろう？ どんなことを話せばいいのだろう？

どんどん、気になっていってしまう。

どんどんどんどん——。

けれど、明日になったら、全てが分かる。それまでだ。それまでの辛抱だ。

よし、行ってやる。

〔ハチ公前〕に。

行ってやる！

## 8

そして、オレは次の日、ハチ公前にやってきた。

昨日、オレはインターネットを駆使し、いったこともきたことも無い渋谷までどういけばいいのかということをも自分なりに探していた。

カタカタと検索エンジンに文字を打っては〔ENTERキー〕をタン！と押し、検索をする。その繰り返しを何回もした。何回も——何回も。そうしたら、やっと、ここから渋谷まで行く方法を発見することができた。

電車を乗り継ぐという方法が見つかった。というか、この方法がなぜ分からなかったのかがオレには疑問だった。

それで、今日の朝の六時に起き、バイクという移動手段をオレは使い、ここから大体二キロ以上はある最寄り駅（今気がついたけれど、ここってかなり不便なんだな）に三十分くらいかけ、向かった。そして、その最寄り駅（もう人がほとんど利用していないと思われる廃れた駅）から、ガタガタガタガタとけっこう揺れる、のろのろとしたスピードの電車に乗り、のろのろとハチ公前——渋谷に向かった。

そして、今。オレはここ——渋谷にいる。ハチ公前——ハチ公の銅像の前には人間がいっぱいあつまっていた。ギャルとか、ちゃらちゃらしたお兄さんとか——そんな感じの、この世にはいないような人間（ゴミ）がいっぱいあつまっていた。というか、集っていた。わいわいガヤガヤ。うるさい。朝の十時からこの騒ぎよう。確実に近所迷惑だ——あ、というか、ここらへんには人が住んでいないから、近所迷惑にはならないのか。

しばらくすると、なんだか、怒りがどんどん蓄積されていっているような気がしてきた。なんだか——あれ？ イライラがおさまらない。あれあれあれ？ おか——おかしいおかしいおかしい。ふ、ふ、ふざけんな。コロ、ころ、殺すぞ。おい。おいおいおいおいおい！

——言い過ぎだったか。

ま、待とう。

——いや、もうきているかもしれないな。十時を過ぎていたら、きっと、きているだろう。なので、オレは右利きなのに右の手首にまきつけているオメガ（本当にそうなのかは分からない。なぜなら千円で路頭で売っていたから）の腕時計に目をやる。十時二分だった。きている——はず。

けれど、この大勢の人ごみの中から探すのは至難だろうな——。——だが！ 探すしかないんだ！ やるしかないんだ！ うおおおおお！

※※※

---

※※※

「うおおおおお！」と叫んでいる人間をボクは発見した。いや、もしかしたら、発狂しているのかもしれない。なんで叫んでいるのか（発狂しているのか）ということとは分からない。というか、分かるわけが無い。だって、ボクはその本人じゃないのだから。

誰かが、ボクの近くまで来た。うろうろ、おろおろしている。目が泳いでいる。ん。こいつは——ボクの近くまで来ているこいつは——さっきの発狂していた奴だ。「うおおおおお！」と叫んでいた奴だ。狂っていると思った奴だ。ボクの目の前までやってきた。そいつは。さっきの発狂していた奴は。

なにをするんだ。なにをやらかしてくるんだ。も、もしかして——。

あることが、ボクの脳裏には思い浮かんだ。話しかけてくるのではないだろうか——？予想は的中した。「あの」そいつは話しかけてきた。もちろん、ボクに。「あなたは、オガワさんですか？」なんでボクの名前を知っているんだ！ ——あ、そういえば、名前を知らせたんだっけ——って、まさかの——こいつが——ボクが会う予定の——マスヤさん——？

END？